

やる気と売行きの 悲しい相関関係…



東江一紀

アメリカに、デイヴ・バリーというおじさんがいる。

いえ、いえ、おじさんといっても、べつに血のつながりがあるわけではない。

血はつながってないけど、このバリーさんとわたし、どうも脳みそがつながっているという気がしません。発想が、するつとわかち

やう。翻訳者にとっては、じつになんとも、ありがたい関係だ。

何をやっているおじさんかというところ、もう十五年ものあいだ、毎週毎週、《マイアミ・ヘラルド》という新聞にユーモア・コラムを書き続けている。毎年、そのコラムが単行本にまとめられ、ベストセラーになる。

そのほかに、年一冊のペースで書き下ろしの本を出す。それもまた、必ずベストセラーになる。

一九八八年には、ピューリッツァー賞まで取っている。

ふくん、脳みそがつながっている割には、実績も懐具合もずいぶん違うんだね。って、うるさい、ほっといてくれ。

わたしがこのおじさんと出会ったのは、今を去る八年前。某翻訳学校に誘われて、講師を務め始めたころのことだ。

出会ったといっても、フロリダまで訪ねていったわけではない。神保町の路上で鉢合わせしたわけでもない。テレクラで知り合ったわけでもない。あるとき、視線を感じたのだ。はっ。おれの後ろに立つな！

って、こら、こら、ゴルゴ13やってる場合じゃないでしょう。

いえね、《ニューヨーク・タイムズ・ブックレビュー》って書評紙を読んだら、紙面から、紅毛碧眼の変な中年男がこちらをじつと見てるんです。

《Dave Barry Turns 40》という新刊の一面広告だった。著者の顔写真がでかかど載っているの。わたし、ついうっかり、見つめ返してしまった。

いやあ、もう、油揚げあぶらあげにとんぼにびにらまれたたんびですわ

(なんのこっちゃ)。どうやら、デイヴ・バリーのちゅうコラムニストが、四十歳の節目を迎えて、その感慨をユーモラスに綴った本らしい。わたし、当時三十八歳。

背後霊に操られるように、アメリカから本を取り寄せて、むさぼり読みましたですよ。

一読惨憺。なんだ、こりゃ。おかしくて、おかしくて、最初から最後までただおかしただけ。『微苦笑』とか『含み笑い』とか『嬌笑』とかいう上品系の笑いはいっさいなく、全編『馬鹿笑い』のオンパレードだ。

笑い声というなら、『靴靴』なしの『下駄下駄』ばかり。読んで、笑って、あとには何も残らない。燃焼効率百パーセント。
例えば、こんなの。

☆ ☆

ぼくはサッカーのルールをふたつだけ知っている。

1 足のほかに、頭でもボールを扱っていい。

2 でも、それは痛い。

☆ ☆

わかるかなあ。わかかんねえだろうなあ(古いつすね。でも、最近、わたしの周りでもバイバルしてるの)。

ええい、わかかんなりや、わかからせてやろうじゃないか。わたしたしに任せなさい。

背後霊に操られるように(こればかり)、

わたし、せっせと営業して回って、なんとか某社で訳させてもらえることになりました。

それで、四十歳の誕生日の前日に訳了し、めでたく(おめでたく?) 刊行されたのが、『デイヴ・バリーの40歳になったら』という訳書なのだった。

じつは、ちょうどそのころ、このおじさん、日本に来ていて、新作の取材中だったらしい。ちっとも知らなかったけど、翌年いきなり、アメリカで『Dave Barry Does Japan』という本が出て、びっくりさせられた。

はちやめちやなジパング見聞録。三週間のいい加減な取材をもとに、あること(一割)ないこと(七百九十九割)書き連ねた嘘八百割本である。
例えば、こう。

☆ ☆

いくつかの基幹産業では、まだまだアメリカが日本を大きくリードしている……そのひとつの例がピザであり、第二の例もピザであり、第三の例もピザであり、以下そういう例を挙げるときりがない。

☆ ☆

みごとに無内容。こんなくだらぬ文章を日本語にすることに意味があるんだろうか。ええい、乗りかかった黒船じゃ。こいつも訳してやる。

って、なんだかわたし、この人の本を訳すたびに、自暴自棄になって、翻訳界での立場をあやうくしているような気がする。

それはまあ、いいんです。あつてなきがごときわたしの立場なんて……(しくしく)。

困るのは、そうやって出した本が売れないことだ。アメリカじゃ初版数十万部という超売れっ子作家なのに、今まで三冊出た訳書は、いずれも初版しよぼしよぼ、増刷なし。一説によると、返本部数が刷り部数を上回っているという(快挙だ!)。

えくん、これはつまり、翻訳が悪いってことなのかよう、水曜、木曜。

労力と情熱の対価が、あまりにも安いよう、木曜、金曜。

これじゃあ生計を立てていくことができんよう、土曜、日曜。

というわけで、わたしに残されたのは月曜だけとなってしまう(意味不明)。

あれれ、今月はぜんぜんべつのことを書くつもりで、デイヴ・バリーの話題はその枕のはずだったのに、いつのまにか紙数が尽きちゃったなあ。

まあ、いいや。本題もどうせ、同じようなろくでもない話だったんだから。連載の恥は書き捨てだ。今夜はせいぜい、枕を長くして寝ようつと。